栃の實

泉鏡花作

全一章

朝六つの橋を、その明方に渡つたーー此の橋のある處は、いま麻生津と云ふ里である。それから三里ばかりで武生に着いた。みち／＼可懷い白山にわかれ、日野ケ峰に迎へられ、やがて、越前の御嶽の山懷に抱かれた事は云ふまでもなからう。ーー武生は昔の府中である。

其の年は八月中旬、近江、越前の國境に凄じい山嘯の洪水があつて、いつも敦賀ーー其處から汽車が通じて居たーーへ行く順路の、春日野峠を越えて、大良、大日枝、山岨を斷崖の海に沿ふ新道は、崖くづれのために、全く道の塞つた事は、もう金澤を立つ時から分つて居た。

前夜、福井に一泊して、その朝六つ橋、麻生津を、まだ山かつらに月影を結ぶ頃、霧の中を俥で過ぎて、

九時頃武生に着いたのであつた。　ー　誰も言ふ……此處は水の美しい、女のきれいな處である。柳屋の柳の陰に、門走る谿河の流に立つ姿が、まだ朝霧を其のまゝの萩にも女郎花にも較べらるゝ。が、それどころではない。前途のきづかはしさは、俥も此宿で留まつて、あとの山路は、その、いづれに向つても、もはや通じないと言ふのである。

茶店の縁に腰をかけて、渋茶を飲みながら評議をした。……春日野の新道一條、勿論不可い。湯の尾峠にかゝる山越え、それも覺束ない。たゞ道は最も奥で、山は就中深いが、栃木峠から中の河内は越せさうである。それには一週間ばかり以來、郵便物が通ずると言ふのを聞くさへ、雁の初だよりで、古の名將、また英雄が、涙に、譽に、屍を埋め、名を殘した、あの、山また山、また山の山路を、重る峠を、一羽でとぶか、と袖をしめ、襟を會はせた。山靈に對して、小さな身體は、既に茶店の屋根を覗く、御嶽の顋に呑まれて居たのであつた。

「氣をつけておいでなせえましよ。」……暇は荒

れて、洪水に松の並木も倒れた。たゞ畔のやうな街道端まで、福井の車夫は、笠を手にして見送りつゝ、われさへ指す方を知らぬ状ながら、式ばかり日にやけた黒い手を擧げて、白雲の前途を指した。

秋のはじめの、空は晴れつゝ、熱い雲のみ往來して、田に立つ人の影もない。稻も、畠も、夥多しい洪水のあとである。

道を切つて、街道を横に瀬をつくる、流に迷つて、根こそぎ倒れた並木の松を、丸木橋とよりは筏に蹈んで、心細さに見返ると、車夫はなほ手廂して立つて居た。

翼をいためた燕の、ひとり地ずれに辿るのを、あはれがつて、去りあへず見送つて居たのであらう。

たゞさへ行惱むのに、秋暑しと云ふ言葉は、殘暑の酷しさより身にこたへる。また汗の目に、野山の赤いまで暑かつた。洪水には荒れても、稻葉の色、青菜の影ばかりはあらうと思ふのに、あの勝山とは、

まるで方角が違ふものを、右も左も、泥の乾いた煙草畑で、喘ぐ息さへ舌に辛い。

祖母が縫つてくれた鞄代用の更紗の袋を、斜つかひに掛けたばかり、身は輕いが、そのかはり洋傘の日影も持たぬ。

紅葉先生は、その洋傘が好きでなかつた。遮らなければ成らない日射は、扇子を翳されたものである。從つて、一門の誰かれが、大概洋傘を意に介しない。連れて不忍の蓮見から、入谷の朝顔などと云ふ砌は、一杯のんだ片頬の日影に、揃つて扇子をかざしたのである。せずともいゝ眞似をして。……勿論、蚊を、いや、蚊帳を曲して飲むほどのものが、歩行くに目よけをするわけはない。蚊帳の方は、まだしかし人ぎゝも愕るが、洋傘の方は大威張で持たずに濟んだ。

神樂坂邊をのすのには、成程（なし）で以て事は濟むのだけれども、此の道中には困却した。剩へ……其の年は何處も陽氣が惡かつたので、私は腹を痛めて居た。祝儀らしい真似もしない悲しさには、柔

い粥とも誂へかねて、朝立つた福井の旅籠で、むれ際の飯を少しばかり。　しく／＼く下腹の痛む處へ、洪水のあとの乾旱は眞にこたへた。鳥打帽の皺びた上へ手拭の頬かむりぐらゐでは追着かない、早や十月の聲を聞いて居たから、護身用の扇子も持たぬ。路傍に藪はあつても、竹を挫き、枝を折るほどの勢もないから、玉江の蘆は名のみ聞く、……湯のやうな浅沼の蘆　を折取つて、くる／＼とまはしても、何、秋風が吹くものか。

が、一刻も早く東京へーー唯その憧憬に、山も見ず、雲も見ず、無二無三に道を急いで、忘れもしない、村の名の虎杖に着いた時は、杖と云ふ字に縋りたい思がした。――近頃は多く板取と書くのを見る。その頃、藁家の軒札には虎杖村と書いてあつた。

ふと、軒に乾した煙草の葉と、蕃椒の間に、山駕籠の煤けたのが一挺掛つた藁家を見て、朽縁へ〓と掛けた。「小父さんもう歩行けない。見なさる通りの書生坊で、相當、お駄賃もあげられないけれど、中の河内まで何とかして駕籠の都合は出來ないでせう

か。」「さればの。」耳にかけた輪数珠を外すと、木綿小紋のちやん／＼子、經肩衣とか云つて、紋の着いた袖なしをー一外は暑いがもう秋だ　ーー　もつくりと着込んで、裏納戸の濡縁に胡坐かいて、横背戸に倒れたまゝ眞紅の花の小さく成つた、鳳仙花の叢を視めながら、煙管を横銜へにして居た親仁が、一膝づるりと摺つて出て、「一肩遣つても進じようがの、對手を一つ聞かなくては、なう。」「お願ひです、身體もわるし、……實に弱りました。」「待たつせえ、何とかすべい。」お佛壇へ數珠を置くと、えいこらと立つて、土間の足半を突掛けた。五十の上だが、しやんとした足つきで、石塊道を向うへ切つて、樗の花が咲重りつゝ、屋根ぐるみ引傾いた、日陰の小屋へ潜るやうに入つた、が、今度は經肩衣を引脱いて、小脇に絞つて取つて返した。「對手も丁度可かつたで。」一人で駕籠を下すのが、腰もしやんと樂なもので。　ーー　相棒の肩も廣い、年紀も少し少いのは、早や支度をして、駕籠の荷棒を、えツしと擔ぎ、片手に　ーー　はじめて視た　ーー　繪で知つたほゞ想像のつく大きな蓑蟲を提げて出て來たのである。「あゝ、御苦勞樣　ーー　松明で

すか。」「えい、松明でや。」「途中、山路で日が暮れますか。」「何、歸りの支度でや、夜嵐で提灯は持たねえもんだで。」中の河内までは、往還六里餘と聞く。　ー　駕籠は夜をかけて引返すのである。

留守に念も置かないで、そのまゝ駕籠を舁出した。「おゝ、あんばいが惡いだね、冷えては成んめえ。」樹立の暗く成つた時、一Ruby>度下して、二人して、二人が夜道の用意をした、どんつくの半纏を駕籠の屋根につけたのを、敷かせて、一枚。一枚、背中に當がつて、情に包んでくれたのである。

見上ぐる山の巖膚から、清水は雨に滴つて、底知れぬ谷暗く、風は梢に渡りつゝ、水は蜘蛛手に岨を走つて、駕籠は縱に成つて、雲を仰ぐ。

前棒の親仁が、「此の一山の、見さつせえ、殘らず砺の木の大木でや。皆五抱へ、七抱へぢや。」「森々としたもんでがんせうが。」と後棒が言を添へる。「いかな日にも、はあ、眞夏の炎天にも、此

の森で一度雨の降らぬ事はねえのでの。」清水の雫且つ迫り、藍縞の袷の袖も、森林の陰に墨染して、襟はおのづから寒かつた。ーー「加州家の御先祖が、今の武生の城にござらしつた時から、斧入れずでの。何ういふものか、はい、御維新前まで、越前の中で、此處一山は、加賀領でどざつたよーーお前様、なつかしかんべい。」「いや、僕は些とでも早く東京へ行きたいんだよ。」「お若いで、えらい元氣ぢやの。……はいよ。」「おいよ。」と聲を合はせて、道割の小瀧を飛んだ。

私は駕籠の手に確と縋つた。

草に巨人の足跡の如き、沓形の峯の平地へ出た。巒々相迫つた、かすかな空は、清朗にして、明碧である。

山氣の中に優しい聲して、「お掛けなさいましな。」軒は巖を削れる如く、棟廣く柱黒き峯の茶屋に、木の根のくりぬきの火鉢を据ゑて、疊二疊にも餘りなむ、大熊の皮を敷いた彼方に、出迎へた、む

すび髪の色白な若い娘は、唯見ると活ける其の熊の背に、片膝して腰を掛けた、奇しき山媛の風情があつた。

袖も靡く。……山嵐颯として、白い雲は、その黒髪の肩越に、裏座敷の崖の欄干に掛つて、水の落つる如く、千仞の谷へ流れた。

その裏座敷に、二人一組、別に一人、一人は旅商人、二人は官吏らしい旅客が居て憩つた。いづれも、柳ケ瀬から、中の河内越して、武生へ下る途中なのである。

横づけの駕籠を覗いて、親仁が、「お前さま、おだるけりや、お茶を取つて進ぜますで。」「いゝえ出ますから。」

娘が塗盆に茶をのせて、「あの、栃の餅、あがりますか。」「駕籠屋さんたちにも何うぞ。」「はい。」ーー其處に三人の客にも酒はない。皆栃の實の餅の盆を控へて居た。

娘の色の白妙に、折敷の餅は澁ながら、五ツ、茶の花のやうに咲いた。が、私は矢張り腹が痛んだ。

勘定の時に、其を言つて斷つた。　ーー　「うまくないものゝやうに、皆殘して濟みません。」あゝ、娘は、茶碗を白揚に汲みかへて、熊の膽をくれたのである。

私は、じつと視て、而してのんだ。

栃の餅を包んで差寄せた。「堅くなりませぅけれど、……あの、もう二度とお通りにはなりません。こんな山奥の、おはなしばかり、お土産に。ーー此の實を入れて搗きますのです、あの、餅より之を、お土産に。」と、めりんすの帶の合せ目から、ことりと拾つて、白い掌で、此方に渡した。

小さな鷄卵の、輕く角を取つて扁めて、薄漆を掛けたやうな、艶やかな堅い實である。

すかすと、きめに、うすもみぢの影が映る。

私はいつまでも持つて居る。

手箪笥の抽斗深く、時々思出して手に据ゑると、
殼の裡で、優しい音がする。

【完】